

risei + trip

vol.
03



特集

まっすぐ、
女子野球！



まつすぐ、 女子野球！

4月上旬、初夏のような日差しの中、高知県で行われた侍ジャパン女子代表の最終選考合宿。本校から挑んだ野球コース1年生4名の姿を追った。



photographs by Shota Matsumoto



(写真右)左から安達さん、吉井さん、北山さん、緒方さん(左上)太平洋を望む安芸市営球場(左下)紅白戦、キャッチャーは緒方さん、打席に吉井さんが立った時の一枚。

高知の空は高く、雲一つない青空が広がっていた。日差しは強いが風はひんやりと心地よい。水の張られた田んぼが春を知らせる。高知龍馬空港から、東へ海沿いに車を走らせること約30分。小高い「マリン」に安芸市営球場があった。

選ばれるのは20名。

彼女たちがこの場にいる理由は一つ。侍ジャパン女子代表選手選考のためだ。今年8月、米国フロリダにてWBSC女子野球ワールドカップが開催される。指揮官を務めるのは履正社医療スポーツ専門学校北大阪校、野球コース教員の橋田恵監督だ。6連覇がかかっているその大会に向けて、プロ選手を含む35名の候補選手の中から20名の代表選手をこの合宿で選抜する。

その中に、本校野球コース1年生の4名がいた。緒方佑華さん(捕手)、吉井温愛さん(内野手)、北山未来さん(外野手)、安達瑠さん(外野手)だ。みな若干19歳。やはり合宿初日、顔が強張ってしまう。しかし緊張のほぐし方は心得ていた。北山さんは打席に立つときのルーティンで、高校日本代表主将でもあった吉井さんは馴染みの選手と会話することで気持ちを落ち着かせていた。

コミュニケーションがテーマの一つとして掲げられた今回の合宿。サバイバルとはいえ、球場には何か一体感さえ漂っていた。準備や整備は皆で行う。練習や紅白戦中でも選手間のやりとりは多く見られた。安達さんは、先輩からポジションのとり方や守備位置を、北山さんは打てなかった時にバッティングについてアドバイスをもらった。緒方さんはベンチに戻る際、ピッチャーたちと話し合う。前回行われた宮崎合宿より、積極的なプレーや声かけができたと振り返った。しかし、もっとアピールできたのではと悔しさも滲ませる。それぞれに新たな課題を見つけたよった。

家族も一緒に戦っている。

そんな彼女たちをそっとスタンド席から見守るのは、4名それぞれの家族だ。全国どこでも駆け付けるというから、心強い。安達さんは、福岡県出身で、小学1年生から野球を始めた。京都の高校へ進学後はずっと関西で生活を続ける。試合などがある度、お母さんは応援に向かうそうだ。時には、夜行バスに乗り込み、0泊3日で往復することも。我が子を想う母の姿は、とても眩しかった。また、チームトレーナーとして本校アスレティックトレーナーコースの小田啓之先生も帯同。選手のコンディショニングを常にチェックし、全面的にサポートしていた。

履正社スポーツ専門学校北大阪校の野球コースは、選手や指導者、審判、国際公式記録員、大学編入学など学生が多様な進路希望先にあわせた授業を展開している。元プロ野球選手の指導法を至近距離で学べるタイガースアカデミー実習も、指導者を夢見る学生にとって貴重な経験だ。

今年女子学生への入学も多かった。日本代表メンバーも、それ以外の学生も、みなが自分の将来を思い描き、野球と向き合う日々を送っている。